

2024 年 ハローアルソン・フィリピン医療ボランティア 現地活動報告

2024 年 2 月 7 日(水)～10 日(土)

「羽田空港集合」

午後 10 時

フィリピン航空のチェックインカウンター前には既に大勢のメンバーが集まっている。
今回も事前に事務局が用意した恒例の「10キロ物資」を茨城県支部の山川さんが自身の会社の倉庫に保管し、トラックで空港まで届けてくれた。
飛行機の手荷物は一人、2つ（23キロ未満）まで預けられるため、毎回現地で配布する物資を運んでいる。袋詰めし、今回は「10kg物資」を80袋用意した。
いよいよ【第18回ハローアルソン・フィリピン医療ボランティア現地活動】の初めての朝礼が空港内で始まった。



全参加者が各班に分かれ班長を先頭に着席をしている。今回は101名が9班に分かれたが、各班長は過去高校生の時に現地活動に参加をしたOB・OGの子たちだ。
それぞれ大学や専門学校に進学し、再びこの活動に帰ってきてくれた。一回りも二回りも成長した彼らとの再会は本当に嬉しく頼もしかった。

事務局より執行部が紹介され各担当から諸注意が伝えられる。これから約4時間後にはフィリピン・マニラ・ニノイアキノ空港に到着する。

今年は初の試みとなる「深夜発一早朝着」、そして3日間の医療奉仕活動となる。全国から集まった101名の仲間と共に今年はどんな感動や悲しみに出会うだろうか…。



「マニラ空港到着」

午前5時50分

マニラ・ニノイアキノ空港到着

入国には事前に専用アプリを登録し、個人情報を持携帯を通じて確認される。

その後税関ゲートを通るが、今回もまた「10キロ物資」が問題となり入国を止められた。

職員とのやりとりで、どうやら今後この国に国際寄付などの物資を持ち込む場合は関税の対象となる法律ができたらしい。そこには受け取りが政府機関や社会福祉開発省などの行政機関であれば免除されるが、スラムの住民への寄付となると関税の対象になるとのことだった。発想が逆のような気がするが仕方がない。私は「この物資は日本で沢山人達が協力してくれていること」「約20年間続いている国際親善も兼ねた医療活動であること」そして何より「スラムで今か今かと待ちわびている人たちが沢山いること」を説明した。

すると一人の担当者がやや根負けしたように今回は無税での通過を認めてくれようやく入国が完了した。

全員で物資や荷物を運びバスに乗せる。外には既にマニラ・ラハ・ソライマン・ロータリークラブのメンバーや長年のパートナーでもあるポンセ家の面々、通訳達が待っている。いよいよ出発だ。



現地活動初日

場所：Rafael Palma Elementary School

「医療奉仕活動開始」

私たちが到着したのは午前10時45分。

予定より大幅に遅れた。

私は皆が準備をしている中、沢山の患者が待つ座席に向かい先頭の住民に尋ねた。「あなたは何時から待っているの？」彼は言った。「6時からです。」そして周りの住民たちも皆同

じように早朝から待っていたのを知り、遅くなってしまったことを詫びると、彼らは笑顔で「先生、問題ありません。来てくれてありがとう。」と笑顔で答えてくれた。



ここは無料の公立の小学校でありスラムの中心に位置する。フィリピンでは主に 5 歳から入学し 12 歳で小学校を卒業する。そして 13 歳から 18 歳まで高校生となる。ここには 2,670 人の生徒が所属し 120 人の先生がいる。しかし、実際に通学するのは約 70% と言われ、最貧困層の子供たちは物売りやゴミ拾いなどをして生計を支えている。

この住民の一日の平均収入は約 500 ペソ（約 1,300 円）と言われ、大人も子供もゴミ拾いや路上での物売り、または工事現場の仕事を生業としている。

エリアには無料の病院はあるが満足いく治療や薬は手に入らず、皆限界まで我慢をするという。

私はこの小学校の校長先生に尋ねた。「私たちの活動は役に立ちましたか？」校長は言った。「生徒やこの住民たちの中には初めて歯科治療を受ける人が大勢います。」

そして恐らくこの先再び治療を受けるチャンスはとても少ないだろう。皆さんが来てくださったおかげで沢山の人が痛みから解放されました。」

「来年も是非いらしてください。お願いします。」

私は確約ができぬ現実に関心を痛めながら笑顔で「ありがとうございます。」と答えるのが精一杯だった。



全ての準備が整い、いよいよ患者さんの治療が始まる。

既に体感温度は 30 度は超えているだろうか。初めて参加をする中高生 36 名の少し不安と戸惑いの表情がとても印象的だ。

特に、抜歯ブースに配属された高校生たちは目の前で行われる壮絶な抜歯風景に言葉を失う。

日本では治せる歯もこのスラムでは継続的な治療ができないために痛みを取る最後の手

段であるため「抜歯」を選択せざるを得ない。また日本とはまるで違う環境下での抜歯は大変難しく、先生方も滴り落ちる汗を拭うことなく懸命に治療をしている。

その隣で高校生たちは自分たちの無力さを感じながらも、それでも今自分にできる何かをするために皆自然に患者さんたちの手を握りしめ「カヤモヤン（頑張って!）」と叫ぶ。患者さんたちは不安と恐怖で涙を流しながら彼らの手を握り返すが、そのあまりにも強い力に高校生たちは再び言葉を失った。

私はその光景を見ながら彼らに伝える。

「この光景を決して忘れてはならない。患者さんたちが君たちの手を握る力を一生忘れてはならない。そしてこの経験を必ず自分たちの将来に役立たせて欲しい。」

ある高校生が言った。「抜歯をしている時私は何もできなかった。しかし歯が抜けた後、私の手を握って『サラマッポ・ありがとう』と何度も言ってくれる患者さんを見て何故か涙がでました。」



全ての治療を終えたのは午後3時。

約4年ぶりに開催された現地活動初日が終わる。

早朝マニラに到着し寝不足と疲れ、慣れぬ環境の下大きな怪我や事故も無く無事終了した。

2月8日

医療奉仕活動2日目

場所：Tangulan Arena Multi-purpose Hall Binakayan Kawit Cavite

「初めてのカビテ市での活動」

私たちの活動場所は今まで主に首都マニラ市に点在するスラムを中心としてきた。

その理由としては私たちの現地パートナーの管轄地域の問題や移動時間、安全面の確保を重視してきた為、フィリピン国内の様々な地区からの依頼を受けても実現することが難しかった。

しかし、今回マニラ市の隣、「カビテ市」の市長から直々に依頼を受けた事により、18年間のハロアル史上初めて郊外での活動を行うことになった。

活動地区はカビテ市。ビナカヤン・カウイットと呼ばれるエリアでカビテ市の中心部に位置するもっとも大きい集落だ。

ここには約2万人が住んでおり周囲はマニラ湾に面しているため住民たちは主に漁業を生業としている。一日の平均収入は約500ペソ。(1,300円) 海岸沿いには多くのスラムが形成され、首都マニラ市内に比べて就学率も低い。



今回、このエリアでの活動が決定したもう一つの要因は実はここには毎年活動最終日に物資配布のみを行っていた。私たちの長年のパートナーで地元の名士でもあるポンセ家の自宅もここにあり、毎年最終日に物資を配布しながら住民たちから「いつ、医療活動をやってくれるのか。」と懇願され続けて来た。

その為、行政と地元名士たちが一つになって私たちの活動を迎え入れてくれたことはとても意義がありこれからの活動にも大きな影響を与えるだろう。

午前8時30分

けたたましい消防車のサイレンに誘導され私たちを乗せたバスが会場に到着した。

会場となる市役所に隣接された体育館に入ると、そこには治療チケットを握りしめ早朝より既に数百人の住民たちが待っていた。



この治療チケットは別名「神様のチケット」と呼ばれている。

貧困によって歯科治療を受けることが出来ないスラムの人達は「神様が一生で一回にな

るかもしれない無償の治療を与えてくれた。」と口々に言う。そのチケットは事前に集落（バランガイ）のメンバーたちが配布する。沢山の希望者がいるため原則一人につき 1 本の治療しか行うことができない。それでも彼らは笑顔で私たちを迎え入れ感謝してくれる。

体育館の2階にはコートを囲むように観覧席が設けてあるがそこには沢山の患者さんたちが座っていた。私は彼らの下に行き尋ねた。「皆さんは何時から待っているの？」彼らは「6時からここに来ているよ、先生来てくれてありがとう。」彼らの手には「神様のチケット」が見える。私はすぐに準備をするから待っていて、と話、「皆さんは何の治療を希望しているの？」と尋ねるとそのほとんどが「歯を抜いて欲しい！」と叫ぶ。ここで待つ患者さんはごく一部。これから大勢の住民がこの会場にやってくる。



「医療奉仕活動開始」

午前9時45分。

全てのブースの準備が整った。

現地統括責任者 今西先生から注意事項が伝えられた後、101名全員が手を握り合った。そして今日の活動の安全と成功を祈願し、毎年恒例の掛け声上げる。「それではみんなで頑張りましょう！セーの！ハロー！アルソン！！」会場にこだました「ハローアルソン」医療奉仕活動2日目が今始まった。



「貧困と格差の中で」

全ての患者さんはまず「問診ブース」を受診する。一人一人どこの部位を治療して欲しいかを聞きながらお口の中を診察し、特に子供の場合は親の承諾も必要になるため、日本と同じように状況を説明する。

今回改めて感じた事は首都マニラ市内のスラムとは異なり、ここカビテ市の治療は圧倒的に「抜歯」が多い。地方都市は首都マニラと比べ賃金も低くまた貧富の格差が大きい

め、今日食べることに困窮するスラムの人達のお口の中は虫歯、破折、感染と様々な重篤な症状が見られる。



そして最も悲しいことは、残り僅かな健康な歯も抜かなければならないことだ。

入れ歯には部分入れ歯（部分的に歯を失った方）と総入れ歯（全て歯がない方）があるが、フィリピンでは総入れ歯よりも部分入れ歯の方がはるかに高価である。

そのため住民たちの中には残り数本の歯をあえて抜き、安価な総入れ歯を希望する人が大勢いる。勿論日本ではそのような理由で抜歯をすることはないが、1本の抜歯するために数日分の収入を費やさなくてはならないため、住民はこぞって抜歯の希望をする。私は歯の大切さや健全な歯を抜く必要がないことを説明するが、悲しいことにそれを理解するための歯科治療に対する価値観や教育を受けておらず、皆、それでも抜いて欲しいと懇願する。

私は自分の無力さに打ちひしがれながら、彼らの切実な事情を理由に「抜歯」を診断する。貧困は人類最大の「罪」だ。そして何不自由なく暮らし、全てが有り余る社会に生きる私たち日本人には到底理解できない現実がここにはある。

私の診断したカルテを嬉しそうに握り、何かに解放されたかのように笑顔で抜歯ブースに向かう住民たちの背中を私は見送ることしかできなかった…。



「医療活動二日目終了」

午後3時。

全ての治療が終わり、現地スタッフとの記念写真を終えバスに乗る。

初めて活動をしたエリア。「カビテ市・ビナカヤン・カウイット」は18年間この活動を心待ちにし、多くの住民たちが私たちを暖かく迎え入れてくれた。

帰りのバスもカビテ・ロータリークラブの消防車がサイレンを鳴らしながら渋滞をかき

分けるように私たちを先導してくれている。

バスの中は皆疲労困憊によって皆しばしの休息時間となった。

外は少しずつ日が落ち始め、世界でも有数の美しさを誇る「マニラ湾の夕日」がオレンジ色に空を染め始めた。

多くの人達の思いと支えにより素晴らしい活動ができた。

私は振り返り車窓から注ぐ柔らかな夕日に照らされる参加者の皆さんの寝顔を見ながら心からの感謝を抱かずにはいられなかった…。



医療奉仕活動 3 日目最終日

場所：Don Bosco Youth Center Tondo Manila

午前 6 時。朝食会場にはすでに沢山のメンバーが集まっていた。今日は医療奉仕活動 3 日目、最終日となる。

あちらこちらで「おはようございます！」と声が聞こえる。

今日はホテルから車で約 40 分、私たちが継続的に支援している地域「トンド地区」だ。

Poorest of the poor 「貧困の中の貧困層」

2020 年に一度同じ地区で活動を行っている。今回、マニラチームのもとへこのエリアの代表から切実な依頼を再び受け、検討を重ね、このエリアの活動を正式に受けた。

この地区は 1980 年代、「スモーキーマウンテン」と呼ばれる「ゴミ捨て場」が存在していた地域だ。

当時フィリピンでは日本のようなゴミの分別や焼却システムはなく全て「埋め立て」をしていた。そしてこの地区には毎日首都マニラから数千トンのゴミが運ばれその中にプラスチックや鉄くずなども一緒に捨てられることからいつしかそのゴミが山となり、ゴミ同士が化学反応を起こし自然発火をし、噴煙をあげることからこの名がついた。ここは別名「地図に載らない地区」「フィリピンの恥部」とまで言われ東洋一のスラムとなっていた。そしてそのゴミの中からお金に換金できる物を拾い生活をする人々を「スカベンジャー（注・差別的用語）」と呼び、その人々が集落を形成し、多い時に 2 万人とも 3 万人と言われる人たちが住んでいた。

現在ここは閉鎖され別の地域に移動となったが、ここはマニラ湾にも面していることから未だ最貧困層地区であり、多くのスカベンジャーたちがゴミを拾い生活をしている。



今回、2020年度の活動で訪れた「ドン・ボスコ・ユースセンター」とばれる教会内にある広場を再び使用し、「貧困の中の最貧困層」とばれる住民たちの治療を再度行うことになった。

ここには現在18万人が暮らしており、その中で子供たちの就学率は約70%とされている。住民の仕事は主にトライシクル（乗り合いのバイクタクシー）や小売り、物売りをし、一日の平均収入は約300ペソ（約700円）と言われ、私が2020年度に訪れた時よりは100ペソほど収入が増えていた。

しかし、未だマニラ国内でも最も危険な貧困地区であり犯罪の温床になりうる環境は変わらず、現地の人達でさえここを訪れるのは危険だと言う。



午前9時30分。

「医療奉仕活動開始」

最後の医療奉仕活動が始まる。

既に多くの患者さんが待機している中、会場周囲はバランガイ（集落）、ロータリークラブのメンバーの他に警察、消防、そして Philipne Coast Guard（フィリピン湾岸警備隊）と呼ばれる兵が小銃を片手に警備にあたる。多くのメンバーが笑顔で準備を進める中、改めてこの地区の貧困と危険度を感じる瞬間だった。



いよいよ今年最後の医療奉仕活動が始まる。

「高校生たちの歯ブラシ指導」

活動ブースには「クリーニング・歯ブラシ指導ブース」がある。

ここでは歯科衛生士さんが担当し、住民たちに歯の大切さや歯ブラシのやり方、歯石の除去などを行う。

スラムの人達は誰かに自分のお口の中を掃除してもらうことなど皆無なため毎年沢山の住民が殺到する。

その中で最も大切なのは「歯磨きの啓蒙活動」だ。貧困の為たった 1 本の歯ブラシさえ買うことができない彼らは正しい歯磨きのやり方を知らない。

そこ高校生たちは現地の言葉「タガログ語」を使い紙芝居を用いて正しい歯磨きのやり方を伝える活動を担当してもらっている。

高校生全員が日本で各自製作してきた「歯ブラシ絵本」を持って各ブースで待機している患者さんのもとに行き、初めてのタガログ語で話し始めた。隣には通訳の方がフォローするが、正しい発音などここでは必要ない。海を越え、国境を越え、日本の高校生たちが「誰かの為に」という志一つで集まり、今、皆さんからご協力頂いた歯ブラシを手に皆笑顔で語りかけている。

高校生たちの笑顔とそれを受け入れてくれる住民たちの優しさの前にはもはや職業や年齢、ましてや医療従事者の資格など無意味だった。

時に笑い、時に手を取り合って皆歯ブラシをまるでボランティアのバトンのように思い思いのやり方で歯の大切さを伝えてくれた。





「シャワーブース」

今回の活動で4年ぶりに「シャワーブース」が再開した。

スラムの子供たちは日ごろ日本の子供たちのようにきれいな水で体や髪の毛を洗うことはできない。高価なシャンプーやリンスなどを使うこともない。彼らはスコールが降ると一斉に外に飛び出す。そして雨どいの下に集まり雨水で体を洗う。また、雨が降らない場合は近くの川に行き水浴びをしながら髪の毛を洗うだけだ。

水はとても貴重なため、まず食事などの生活用水に使用しその残りを洗濯などに使う。そのため、スラムの子供たちの体は真っ黒な垢にまみれ、髪の毛は固く粘土のように絡まっている。その事実を知った私たちはたった1度きりかもしれないが、何とか彼らの体や髪の毛を洗ってあげたいと思い、このブースを数年前から立ち上げた。



しかし、勿論温かなお湯などはない。使うのは活動をサポートするロータリークラブの消防隊の給水車だ。

事前にシャワーブースがあることを告知し、両親の承諾のもと女子と男子にそれぞれ分け、2つのブースを設営する。そして担当するメンバーも男女に分かれ、周囲からその様子を見られないように仕切りを作る。しかし30度を超える暑さといえども給水車からの水は冷たい。そのため日本からバスタオルのご協力をお願いし、シャワー終了後すぐにバス

タオルで拭き、プレゼントする。

すでに100人以上の子供たちがシャワーの開始を待っていた。

シャワーが始まると子供たちの歓声や笑い声が聞こえてくる。石鹸やシャンプーを使ってもなかなか汚れが落ちない。ここでは主に一般参加者の皆さんと高校生が担当してくれる。高校生達は慣れない手つきだが皆とても楽しそうに活動をしている。豊富な水と石鹸やシャンプー。日本では当たり前のことがここでは人生で初めての経験となる子供たちがいる。

だんだんと汚れが落ち、きれいな肌を見て日本の高校生たちは何を感じたのであろうか・・・。



「悲しみの耳鼻科ブース」

この活動で唯一の医科のブース「耳鼻科ブース」

ここは今年で参加8年目となる木村医師が担当してくれる。

スラムの人達は歯科治療はもちろん、人生の中で一度も耳掃除をしたことがない人も沢山いる。そのため菌による感染症や耳垢によって聴力の低下を訴える人も多く、また、それ自体に気づかないため処置を受けた後「こんなにも聞こえる！」と喜ぶ方が沢山いる。

また、このブースは耳鼻科の領域だけではなく喘息や腫瘍、アレルギー性鼻炎や皮膚炎など多くの相談も受けていた。



その中で今でも忘れられず、夢に浮かぶという患者さんとの出会いがあった。

ある4歳の小さな女の子と2歳の男の子が母親に連れられてやってきた。診ると上下の唇がただれ、血まみれの状態だ。事情を聞くと1週間前におそらくペットボトルか何かの筒状の物の内圧が高まり、爆発し、その衝撃で子供たちが怪我をしたという。

幸い二人とも唇の損傷は軽傷であったが、弟の診察をするとその様子は一変した。

2歳の男の子は唇の損傷以外に頸の真ん中に直径5センチほどの巨大な腫瘍が見られた。そしてその腫瘍は自壊し、食事も困難な状況であり全身状態も悪くすでに意識は朦朧としていた。先生の診断によると外傷性頸部の深部膿瘍による敗血症が疑われた。このまま放置すれば1週間持たない命。先生は自壊部分を小さく切開し、お茶碗1杯分もの膿を排出させた。その後患部に大量の抗生剤を塗布し、ロータリークラブの責任者に大きな病院への搬送を依頼した。

先生は母親にも事情を説明した。しかし、母親は病状の深刻さを深く理解をしていないのか、もしくは既に諦めているのか、どこかうつろな目で一言「It's OK」とだけ答え何の迷いも無くスラムに帰って行った。



先生は思った。「私たちが考える価値観や常識では測れないスラムに生きる人たちの生き方の選択肢…。」「恐らく母親はスラムで生まれ、スラムで生き、そしてスラムで死んでいくことを当然のように受け入れているのだろう。」

医師としてあまりにも無力な自分に先生は帰国後も悩み、今も葛藤しているという。

人生で初めて耳の治療をおこない、こんなにも声や音が聞こえる喜びを与えられる医師の言葉はこの母親に届かなかった。しかしその切なさを抱えながらまた一人患者さんがやってくる。

笑顔の裏に沢山の悲しみがある現実を改めて知った…。

「全ては患者さんの笑顔の為に」

午後2時30分。最後の患者さんが会場を後にし、2024年度ハローアルソン・フィリピン医療ボランティア現地活動の全ての医療奉仕活動が終了した。

今年も最終ブースは「技工ブース」だった。

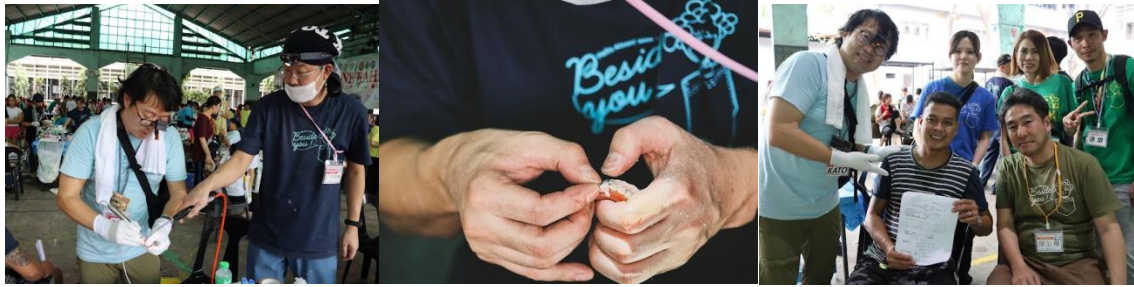
日本では通常数週間を要して製作される「入れ歯」もここでは全ての工程を当日で行い、尚且つ繊細な技術で私たちが帰国後も不具合の無いよう調整し装着しなければならない。歯科医師の技術は勿論のこと改めてこの紙面をお借りし、入れ歯製作に携わった皆さん、特に歯科技工士の皆さんには心からの感謝と敬意を送りたい。

蒸しかえる暑さの中、それこそ昼食の時間も惜しみながら黙々と義歯を作る姿は正にスペシャリストの名に相応しく、彼らの努力と協力がなければ決して成り立たない活動だった。スラムでは例え歯を抜くことができたとしても、数か月分の収入に相当する入れ歯を手に入れるのは本当に難しい。そのため健康的に食べるということはもちろんのこと消化器系や全身的疾患だけではなく、将来的には寿命にさえ影響する。

活動は一応の時間的制限はあるが今年もまた会長林春二先生が「全ては患者さんのために頑張ろう。」と、疲れた体に最後のエネルギーを注入するかのよう、入れ歯が製作され、無事患者さんのお口の中に入れることができた。



この思いはもちろん日本での治療と何ら変わりはないが、神様のチケットを握りしめ、何千人の中から幸運にも入れ歯を手に入れた患者さんたちはその喜びから涙を流して感謝をする。私たちはその涙を見た時あらためて医療人として最も大切なものは何かということ学び、そして一人の人間としてボランティアという無償の行為から互いを支え合う「心」を学んだ。



全ての治療が終わった。現地統括責任者今西先生から全参加者への感謝の言葉が伝えられる中、私は会場を見まわした。そこには101名の参加者の他、通訳やバランガイのメンバー、ロータリークラブ、そして護衛をしてくれた警察や消防、警備隊の皆さん、どの顔をとっても皆笑顔に包まれていた。

「全ては患者さんのために」

私たちはその思い一つでこの地にやってきたが、実は最も笑顔にさせてもらえたのは私たち自身だったのだろう・・・。

「感謝を込めて」

2020年からコロナ禍の為延期となっていた現地活動も約4年ぶりに全ての規制を解除し全国から101名の皆さんの応募を得て、2月7日～10日の4日間、無事活動を終えることができました。

これも日ごろ多くの方のご協力と、不安定な社会情勢の中、大切な家族、お子さんのご参加を後押ししてくださったご家族、会社や学校関係の皆様にご心からお礼申し上げます。

今回の活動はハロアル史上初となる深夜便での出発、そして早朝より準備をし、医療活動を3日間行うこととなりました。

決定当初事務局の私たちもどのような結果になるかわからず、ただ今まで以上の準備と心構えを持ち、皆さんの安全、そして意義ある活動にするために努めて参りました。このような条件のもと参加を希望して下さった101名の皆さんには本当に感謝しております。

「ハローアルソン・フィリピン医療ボランティア」は19年前に一人の患者当時10歳の男の子「アルソン君」との出会いから始まりました。

まだ10歳の彼は上の前歯4本を抜かなければならないほど重篤な虫歯に罹患していました。歯科医師としてあまりにも残酷な治療をせざるを得ない状況と無力さの中、全ては変えることはできなくても何かは変わるはずと信じ、皆様のご協力のもと今まで歩んで参りました。

そして高校生というこれからの未来を担う若者たちが参加をすることにより、ボランティアの素晴らしさや「誰かの為に生きる」という共生社会の根幹を共に学びました。

現地で毎晩開かれる「高校生マニラミーティング」では高校生たちが自分の夢をそれぞれの言葉で熱く語ってくれます。



その中で私は彼らに伝えました。

「人間は誰でも自分の為に生きなければならないが、他人の為に生きる意志のないものは決して幸せになれない。」

この言葉は19年前、私が初めてこの活動に参加をした時、会長林春二先生から頂いた教育者濤川栄太先生の言葉です。

私たちが毎年現地に行き無償の歯科治療を行う時、全ての患者さんに手渡される歯ブラシやタオル。

皆さんが1本、また1本と紡ぎ合わせてくれたこのボランティアのバトンこそが、「誰かの為に生きる」ハローアルの原点です。

私たちはこれからも皆さんと共に「人間の本当の幸せの意味」を見つけながら歩んでいきます。

最後にこの活動を支援して下さる全ての皆様に心からの感謝を申し上げます。

そしてこれからも是非「ハローアルソン・フィリピン医療を支える会」にご協力下さりますようよろしくお願い申し上げます。



ハローアルソン・フィリピン医療を支える会
団長 関口 敬人